

「第三章 貴金属と為替相場」

「第三章」の抜粋

P729

「一八四四年の法律の効果が興味をひくのは、この法律が国内のすべての貴金属を流通手段に転化させようとするものだからである。それは、金の流出を流通手段の収縮と同一視しよう（させよう——青山）し、金の流入を流通手段の膨張と同一視しよう（させよう——青山）する。」

P729-735

「貴金属の流入については次のことを注意しておきたい。」と述べて、九つの点を挙げている。

- ①「一方では金銀を産しない地域内での金属の移動と、他方では金銀の産地から他の諸国への流動」等の区別。
- ②「金銀を生産しない国々のあいだでは、貴金属は絶えず流出したり流入したりしている。」
- ③「輸入と輸出とのどちらが優勢であるかは、だいたいにおいて中央銀行の金属準備の増減によって計られる。」
- ④「金属輸出が流出(drain)という形をとるのは」、銀行の準備金が「中位の最低限度まで減少してしまう場合である。」
- ⑤「いわゆる国立銀行の金属準備の使命」は「三重である。」「(1)国際的支払のための準備金」「(2)国内金属流通のための準備金」「(3)預金支払のためや銀行券の兌換性のための準備金」
- ⑥「現実の恐慌はいつでも為替相場の回転の後に、すなわち貴金属の輸入が再び輸出を越えたときに、はじめて起きた」
- ⑦「一般的な恐慌が燃え尽きてしまえば、金銀は再び以前に各国それぞれの準備金として均衡を保って存在していたときと同じ割合で配分される。」
- ⑧「金属の流出は、たいていは外国貿易の状態の変化の兆候であって、この変化はまた、事情が再び恐慌に向かって成熟しつつあることの前兆である。」
- ⑨「国際収支はアジアに順でヨーロッパやアメリカに逆であることもありうる。」

貴金属の輸入…恐慌のあとの二つの時期

P736

「貴金属の輸入はおもに二つの時期に起きる、一方では、利子率の低い第一の局面でのことであって、この局面は恐慌のあとに現われて生産の縮小を表わしている。そして次には、利子率は上がってくるがまだ中位の高さには達していない第二の局面でのことである。…貸付資本が比較的豊富なこの二つの局面では、金銀という形態、つまりさしあたりは貸付資本としてしか機能できない形態で存在する資本の過剰な流入は、利子率に、したがってまた事業全体の調子にも、大きく影響せざるをえないのである。」

貴金属の流出…破局の前触れの時期

P736-737

「他方では、入金がおもに順調ではなくなり、市場は供給過剰になって、外観上の繁栄がただ信用だけによって維持されるようになれば、したがってすでに貸付資本にたいする非

常に強い需要が存在し、したがってまた利子率が少なくともすでに中位の高さに達していれば、そこには貴金属の流出、その連続的な激しい輸出が現れる。このような、まさに貴金属の流出に反映する諸事情のもとでは、直接に貸付可能な貨幣資本として存在する形態での資本を継続的に引きあげることの影響はかなり強くなる。それは直接に利子率に作用せざるをえない。ところが利子率の上昇は、信用取引を縮小させるどころではなく、かえってそれを拡大してそのあらゆる補助手段を過度に緊張させるようになる。それだから、この時期は破局の前触れになるのである。」

中央銀行の金属準備と貨幣と信用

P739

「中央銀行は信用制度の軸点である。そして金属準備はまたこの銀行の軸点である。……いくらかの、といっても総生産に比べれば問題にならない量の金属が、制度に軸点として認められている。」

P741

「恐慌のときには次のような要求が現われる。すなわち、すべての手形や有価証券や商品を一度に同時に銀行貨幣に換えることができるべきであり、さらにこの銀行貨幣をすべて金に換えることができるべきである、という要求がそれである。」

為替相場

P741 エンゲルスの補筆

「貨幣金属の国際的運動のバロメーターは周知のように為替相場である。……

この貴金属輸出がいくら大きくなり、いくら長く続くなれば、イギリスの銀行準備は減らされて、イギリスの貨幣市場は、イングランド銀行を先頭として、防衛策をとらなければならない。この防衛策は、すでに見たように、おもに利子率の引上げである。」

P744

「ウイルソン氏は、貴金属の輸出が為替相場に及ぼす影響を、資本一般の輸出がこの相場に及ぼす影響と同一視するという愚かな試みをやっているからである。……もし、この輸出が貴金属の形で行なわれるならば、この輸出は、それが貴金属であるために、そして貴金属として直接に貸付可能な貨幣資本であり全貨幣制度の基礎であるために、どんな事情のもとでも必ずではないが、しかし前に述べたような事情のもとでは、この貴金属を輸出する国の貨幣市場に、したがってまたその国の利子率に、直接に作用するであろう。……これに反して、もしレールなどの形で資本が送られるならば、それは為替市場にはなんの影響も与えることはできない。……それは貨幣市場にも影響を及ぼす必要はないのである。」

P750 要注意!!

「為替相場が変動しても利子率は不変でありうるし、また利子率も変動しても為替相場は不変でありうるのである。」 ※注) 貨幣流通量を中央銀行が変えずに、為替相場または利子率も変動した場合は、「為替相場」と「利子率」との間には相関関係がある。

商品の価格と貨幣利子

P756-759 要注目!!

ウイルソンは「商品が多すぎれば貨幣利子は低くならないし、商品が乏しければ貨幣利子は高くならない」というが、「物価の下落が利子の下落と同じだとい

うこと」はない。むしろ、「この二つが同時に並存することもありうる。しかし、その場合には、産業資本の運動が起きる方向と、貸付可能な貨幣資本の運動が起きる方向との対立の表現として並存するにあって、それらの同一性の表現としてではないのである。」

「商品の貨幣価格が低いことと利率が低いこととは、必ずしも一体をなしてはいないのである。」※利率を低くすれば産業資本の運動が起きる分けでもないし、利率を低くすれば物価が低くなる分けでも高くなる分けでもない。

P760

「ハッパードの表は、利率と商品価格とはまったく互いに無関係な運動をするが、利率の運動は金属準備や為替相場の運動に正確に適合するということを証明している。」

外国為替相場の変動要因

P764

「外国為替相場は次のような事情によって変動することがありうる。

(1) 当面の国際収支によって。……

(2) 一国の貨幣の減価によって。……

(3) 二つの国の一方は『貨幣』として銀を使用し他方は金を使用している場合には、この二つの国のあいだの為替相場はこの二つの金属の相対的な価値変動によって左右される。」

重金主義と信用主義

P765

「重金主義は本質的にカトリック的であり、信用主義は本質的にプロテスタント的である。……プロテスタント教がカトリック教の基礎から解放されないように、信用主義も重金主義の基礎から解放されないのである。」

「第三章」の要約と現代の私たちが留意すべき点

Ⅰ、「第三章」の要約

この章は、産業循環の中での、貴金属の輸出輸入と為替相場と利率及び商品価格を扱っています。

中央銀行の金属準備と貨幣と信用

中央銀行は信用制度の軸点である。そして金属準備はまたこの銀行の軸点である。いくらかの、といっても総生産に比べれば問題にならない量の金属が、軸点として認められている。いわゆる国立銀行の金属準備の使命は、(1) 国際的支払のための準備金、(2) 国内金属流通のための準備金、(3) 預金支払のためや銀行券の兌換性のための準備金の三つである。だから、輸入と輸出とのどちらが優勢であるかは、だいたいにおいて中央銀行の金属準備の増減によって計られる。

恐慌のときには次のような要求が現われる。すなわち、すべての手形や有価証券や商品を一度に同時に銀行貨幣に換えることができるべきであり、さらにこの銀行貨幣をすべて金に換えることができるべきである、という要求がそれである。

産業循環と貴金属

貴金属の輸入…恐慌のあとの二つの時期

なお、貴金属の輸入はおもに二つの時期に起きる、一方では、利率の低い第一の局面

でのことであって、この局面は恐慌のあとに現われて生産の縮小を表わしている。そして次には、利子率は上がってくるがまだ中位の高さには達していない第二の局面でのことである。貸付資本が比較的豊富なこの二つの局面では、金銀という形態、つまりさしあたりは貸付資本としてしか機能できない形態で存在する資本の過剰な流入は、利子率に、したがってまた事業全体の調子にも、大きく影響せざるをえない。

貴金属の流出…破局の前触れの時期

他方では、入金がもはや順調ではなくなり、市場は供給過剰になって、外観上の繁栄がただ信用だけによって維持されるようになれば、したがってすでに貸付資本にたいする非常に強い需要が存在し、したがってまた利子率が少なくともすでに中位の高さには達していれば、そこには貴金属の流出、その連続的な激しい輸出が現れる。このような、まさに貴金属の流出に反映する諸事情のもとでは、直接に貸付可能な貨幣資本として存在する形態での資本を継続的に引きあげることの影響はかなり強くなる。それは直接に利子率に作用せざるをえない。ところが利子率の上昇は、信用取引を縮小させるどころではなく、かえってそれを拡大してそのあらゆる補助手段を過度に緊張させるようになる。それだから、この時期は破局の前触れになるのである。

恐慌とその後

金属の流出は、たいていは外国貿易の状態の変化の兆候であって、この変化はまた、事情が再び恐慌に向かって成熟しつつあることの前兆である。現実の恐慌はいつでも為替相場の回転の後に、すなわち貴金属の輸入が再び輸出を越えたときに、はじめて起きた。一般的な恐慌が燃え尽きてしまえば、金銀は再び以前に各国それぞれの準備金として均衡を保って存在していたときと同じ割合で配分される。

「金属準備や為替相場と利子率」と「利子率と商品価格」

外国為替相場の変動と貴金属と利子率

外国為替相場は、(1)当面の国際収支によって、(2)一国の貨幣の減価によって、(3)二つの国の一方は『貨幣』として銀を使用し他方は金を使用している場合には、この二つの国のあいだのこの二つの金属の相対的な価値変動によって、変動することがありうる。

貨幣金属の国際的運動のバロメーターは周知のように為替相場である。この貴金属輸出がいくらか大きくなり、いくらか長く続けば、イギリスの銀行準備は減らされて、イギリスの貨幣市場は、イングランド銀行を先頭として、防衛策をとらなければならない。この防衛策は、すでに見たように、おもに利子率の引上げである。

なお、ウイルソン氏は、貴金属の輸出が為替相場に及ぼす影響を、資本一般の輸出がこの相場に及ぼす影響と同一視するという愚かな試みをやっている。そのために、もし、資本輸出が貴金属の形で行なわれるならば、この貴金属は貸付可能な貨幣資本であり全貨幣制度の基礎であるために、この貴金属を輸出する国の貨幣市場に、したがってまたその国の利子率に、直接に作用するということが、しかし、その資本輸出がレールなどの形で資本が送られるならば、それは為替市場にはなんの影響も与えることはなく、貨幣市場にも影響を及ぼす必要はないということ、このことが、ウイルソン氏には理解できないのである。

なお、「為替相場が変動しても利子率は不変でありうるし、また利子率が変動しても為替相場は不変でありうるのである。」(P750)と述べられていますが、貨幣流通量を中央銀行が変えずに、為替相場または利子率が変動した場合は、「為替相場」と「利子率」との

間には相関関係があります。

商品の価格と貨幣利子

ウィルソンは、商品が多すぎれば貨幣利子は低くなければならないし、商品が乏しければ貨幣利子は高くなければならないというが、物価の下落が利子の下落と同じだということはない。むしろ、この二つが同時に並存することもありうるが、それは、産業資本の運動にもとづく物価の動向と、貸付可能な貨幣資本の運動にもとづく利子の動向とが一致する場合であって、それらの同一性の表現としてではないのである。**※利子率を低くすれば産業資本の運動が起きる分けでもないし、利子率を低くすれば物価が低くなる分けでも高くなる分けでもない。**

「金属準備や為替相場と利子率」と「利子率と商品価格」

ハッパードの表は、利子率と商品価格とはまったく互いに無関係な運動をするが、利子率の運動は金属準備や為替相場の運動に正確に適合するということを証明している。

重金主義と信用主義

重金主義は本質的にカトリック的であり、信用主義は本質的にプロテスタント的である。プロテスタント教がカトリック教の基礎から解放されないように、信用主義も重金主義の基礎から解放されないのである。

II、現代の私たちが留意すべき点

まず、私たちが留意すべき点は、「第三章 貴金属と為替相場」においても、「金属準備」や「為替相場」や「利子率」等を資本主義的生産様式における「産業循環」のなかにしっかりと位置づけている点です。「恐慌」問題で「信用」にもとづく「価値実現の短縮」による「架空の需要」だけしか眼中にない不破さんとは大きな違いがあります。

そして、この章で述べられている商品の価格と貨幣利子との関係については、もう一度しっかりと理解しておきましょう。ブルジョア経済学のエセ理論——経済成長のためには2%程度の物価上昇が必要だ、そのためにはマネーの供給量を増やす必要があるという——にもとづいて、いま、ヨーロッパやアメリカ、そして、日本の金融政策が実行されていることを再認識してください。